Osaka University Knowledge Archive

Title	上級学習者に対する「漢字」授業の試み
Author(s)	波多野, 吉徳
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2011, 9, p. 57-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10215
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

上級学習者に対する「漢字」授業の試み

波多野吉徳

【要旨】

本稿は、筆者が大阪大学日本語日本文化教育センターで行っている上級学習者対象の漢字クラスにおける試行の報告である。筆者は、日常生活・研究活動のための漢字能力の向上を目的とする学習者に対しては、試験対策問題集や学習者向けの漢字教科書を使うのではなく、教育ある日本語母語話者が普通に読んで理解できるレベルの生教材を加工せずに読み進めることを通じて、漢字の読み方・意味用法を学ぶことが有効ではないかと考えている。また、以上の方法を用いることにより、漢字の学習を通じて、日本的なモノの見方や現代的なトピックなどを学ぶことができれば、日本事情教育的な効果も期待できると考えている。本稿では、現行の方法を用いて行っている2009年度秋学期および2010年度春学期の授業での実践を報告するとともに、今後の授業を展開していく上での課題を見出したい。

Ⅰ．はじめに

筆者は2009年度春学期から漢字研究（上級）の授業を担当している。本稿では主に2009年度秋学期から2010年度春学期にかけての１年間の授業での実践を中心に報告する。それは、研究留学生および短期留学日本語日本文化特別プログラム（以下メイプル）の学生の受講開始時期が10月であること、また、担当授業は半期完結の授業であるが、この間の学生の中に一年を通じて受講した学生が複数あったからである。

要旨でも簡単に触れたが、筆者の関心は日本語教育という言語教育の中にどのように「文化」の教育を組み込んでいくかにある。それは、山下（2005）が「日本語学習者はレベルの違いはあっても、日本語の四技能、すなわち「聞く・話す・読む・書く」技能の習得を目指す者が多いだろう。漢字学習で言えば、「読み書き」の技能である。」と述べているように、日本語教育はまず、言語教育の観点から語られることが多いからである。一方、学習者にとって言語の学習は言語の習得自体を目的とするものではなく、目標言語の習得はその先にある広くて深い異文化（「日本」）に接近し接触するための手段であると考えられる。この点はみなさんがご自分の外国語学習の経験を振り返られても首肯できることだと推察されるが、授業開始時に書かせた受講動機にも、「新聞を読めるような」、「日常生活に便利な」など「役に立つ」漢字を学びたいという意見が多い。そして私たちが外国語を学ぶ際も、モチベーションが明確か否かや、業務その他での実際の使用を前提とするかどうかが、言語習得の出来不出来につながっていることは経験上知っていることである。この点が、外国語に限らず、未知なもの・ことを学ぶ際に普遍的なものであるならば、材料だけを与えるよりも、材料を使って作られた作品を提示する方が、学習者にとってより興味深いものであるはずである。素材自体を味わうよりも、素材同士を掛け合わせ、時間と手間をかけて作られた料理の方が、より味わい深いだろう。そこにその文化独特の対象への接し方や対象の扱い方が表現されるからである。

やや、抽象的な話になったが、筆者は漢字の授業を漢字自体の習得のみに充てる考えは毛頭なく、漢字（漢語[1]）が実際に使われている「現場」に足を踏み入れることで、学習者の日本

に対する視点を増やし、今後の学習への足がかりとなることを目指している。

Ⅱ．受講生の概要

本節では当該授業の受講生について概要を示す。

2.1．2009年度秋学期

研究留学生（J）	5名	ベルギー２名（両名とも男性）、中国２名（両名とも女性）、ポーランド（女性）
メイプル（MA1）	3名	シリア（男性）、タイ２名（両名とも男性）
同　　（MA2）	5名	中国（女性）、台湾（女性）、タイ３名（全員女性）
合計	13名	男性５名　女性８名　非漢字圏９名

2.2．2010年度春学期

研究留学生（J）	8名	ベルギー（男性）、ドイツ（男性）、オランダ（男性）、ポーランド（女性）、スペイン（男性）、スイス（女性）、タイ（男性）、ベトナム（女性）
メイプル（MA1）	3名	韓国（女性）、シリア（男性）、タイ（女性）
同　　（MA2）	3名	中国（女性）、台湾（女性）、タイ（女性）
同　　（MM1）	1名	フランス（女性）
大学院生	1名	フィリピン（男性）
合計	16名	男性７名　女性９名　非漢字圏13名

MAはメイプル・コースの上級クラス（数字が若い方がレベルはより上）を表し、MMは中級クラスである。人数は最終試験を受け、単位認定した受講生の数である。

下線は、2009年度秋学期と2010年度春学期通年での受講生であることを示す。なお、本来このクラスの対象ではないMM1の受講生は、筆者担当の別クラス（中級文法）の受講生である。

Ⅲ．漢字授業の展開

本節では漢字授業をどのように行っているのかを受講生に開示しているシラバスの記述を用いて概要を示す。

3.1．題目

セメスターによって多少表現の違いはあるが、「楽しく漢字を学ぼう!!」である。「楽しく」には、funとともにinterestingの意味を込めていて、筆者がこの題目をつけた意図の中心は後者にある。特に中国の学習者にとっては漢字自体の習得はすでに終わっているため、知らない漢字を覚えていくという意味での漢字学習自体におもしろさを見出しにくい。非漢字圏の学習者であっても、上級クラスであるため、文字の習得自体は、個人差はあれ相当進んでいる[2)]ので、授業では、基本的な知識から一歩踏み込んだ内容の伝達を行い、日本社会における漢字が持つ効用を伝える過程を通じておもしろさを感じてもらうように考えている。

3.2. 目標

題目の内容を実現するために設定した授業の目標は次の2点である。

①少し難しめの漢字を、テキストの中で用法を確認しながら学ぶこと。
②テキストの内容読解を通じて、日本の「文化」を学ぶこと。

この2つは授業担当当初から一貫して提示している目標である。①の「少し難しめ」には、漢字圏の学習者にとっても、日本では漢字が1字1音で対応していないため、読み方自体が難しめである場合もあるので、いわゆる基礎的な漢字を含める。授業の最初に日本語能力試験の対策を目標としたものではない点を強調しているが、それは教育ある日本語母語話者の読む生の文章を加工せずに教材にしているため、漢字の知識量をシステマチックに増やすことを目的にしている授業ではないことを理解してもらうためである[3)]。また、常用漢字外の漢字を中心に学ぶ授業でもないことを「少し難しめ」に込めている。つまり、常用漢字プラスαが当該授業で扱う範囲である。換言すれば、特殊な文献でない限り読むことができるレベルの漢字を学ぶことである。筆者は読む能力が、情報を受容し、また自ら発信する基礎であると考えるので、当該授業でも読むこと中心の授業を提供している。

「漢字研究」という科目であるため、形式上は①が主たる目標とならざるを得ないが、筆者の意図は、あくまでも上の2つの目標が絡み合いながら相互連関的に達成されることである。それによって、漢字の学習が漢字の習得にとどまらず、各学習者の日本研究や日本への興味関心を一層引き出す動機づけの一助になると考えている。②の文化に鉤括弧を付したように、文化とは何かや、何をもって日本文化と捉えるかは筆者の関心事ではあるが、本稿の範囲を越える為、別稿に譲る。

3.3. 教材

当該授業は、提示したテキストにおける漢字語彙の読み・意味用法を学ぶとともに、復習テストで定着を確認するというサイクルで廻っている。

学習者に配布する教材は、毎回の授業で読むテキストと、それに対応する語彙リストおよび復習テスト、書き方学習に対応するための宿題、および参考資料である。そのほか、学期の初めに授業の目標レベルを知らせるための、短文を用いた確認シートを用いている。テキスト、語彙リスト、復習テスト及び、確認シートの例を稿末に提示しているのでご参照願う。

3.3.1. テキスト

主に、新聞記事コラム・雑誌記事コラム・単行本の一部などを使用している。1セメスターに読めるテキストは、多くても8本程度である。

2009年度秋学期では、新聞記事として「時代を駆ける　富野由悠季」、「記憶と教訓　阪神大震災・企業の15年」（以上いずれも連載の1回分）、「女の気持ち　社長の余白」、「食卓の一品　豚バラの香り蒸し」（いずれも毎日新聞より）を、雑誌コラムとして「表紙の人　中田英寿　僕がオファーするんじゃなくて、地方が立ち上がるのを待ってます」、「平成雑記帳　たんに物価の下落を歓迎していいのか。デフレをもう一段、考えるときがきた。」（いずれもAERAより）

「1989年から遠く離れて　製造業の中核から」（朝日ジャーナル別冊1989－2009より）を、単行本の一部として「私のスクラップブックから」（田辺聖子『乗り換えの多い旅』より）の８本を読んだ。

2010年度春学期では、単行本の一部として「「匠の技」の断絶と流出　ものづくり大国の凋落がはじまる」「移民開国への土壇場　人材の空洞化は避けられない」（『日本の論点』編集部編『10年後の日本』より）、「「建築の大阪」を歩く」（橋爪紳也監修　高岡伸一・三木学編著『大大阪モダン建築』より）および、今年度の大阪大学入学式における学長告示（鷲田清一学長による）を読んだ。

2009年度春学期に、受講生からの希望もあり、セメスターの後半に夏目漱石の『こころ』の「下　先生と遺書」の一部を読んだが、存外時間がかかり内容的に中途半端に終わってしまったことから、長くとも３コマ程度で内容が完結する長さのものを読むようにしている。それでも上述のように、あまり多くのテキストを読めないので、日本文としてこなれたもの、受講生の関心を考えバラエティに富んだものを読むとともに、大阪に関係のある著者、大阪を題材としたものを選択するようにしている。それは、せっかく大阪で留学生活を送っているのだから、授業を学習者が学び生活する場に興味を持つ契機にしたいからである。実際に自分たちが日常的に目にする機会が多い場所への関心を足掛かりとして、「日本」への関心が広がっていくと考えるからである。

３.３.２.　語彙リスト

テキストを読むための漢語リストである。後述のように、授業ではまず一定時間を使って提示した言葉が読めるかどうかの確認を行う。あくまで、学習者が自分の知識のあるなしを確認する作業である。Ａ４版に最大60個の漢語を提示するが、板書を書き込めるように余白を十分取ってある。

３.３.３.　復習テスト

前回までに学習した内容の確認と、授業の最初のウォーミングアップ代わりに、読みと意味用法の正誤問題を各15問前後、10分程度で行う。テスト範囲は前回の授業で提示するが、毎回25語程度が範囲となる。あくまで語彙の定着を学習者・教師双方が確認することを目的としているため成績評価の資料として重視していない。テスト返却時に、特徴的な誤答について追加の説明を行うことで、再確認とともに定着を図る。

３.３.４.　宿題と参考資料

参考書として提示している『日本語学習のためのよく使う順漢字2100』の巻末部分を必要部分だけコピーしたものである。宿題の提出はあくまで任意であるが、学習者は熱心に取り組んでいる。資料は、①日本語の漢字音の特徴、②六書、③部首、④音訓、⑤書き方と画数の数え方、⑥送りがな、⑦二字熟語の構造、⑧漢語動詞の他動詞・自動詞と受身形・使役形についての説明である。このうち、授業で説明をするのは①の中の連濁、連声、③の概略、④の中の二字熟語の読み、⑦である。③については、基本的な部首を１枚で確認できる中学生用の部首一覧も参照資料として配布してある。読みについては、音読み・訓読みを意識させるために、板

書は音読みをカタカナで、訓読みをひらがなを用いて表記している。また、二字熟語の説明の際には、個々の漢字の意味に立ち返り、漢字同士の関係（熟語の成り立ち）から熟語全体の意味を説明している。この点については、次節で再度述べる。

上述のように筆者担当の授業では、漢字の書き方について、授業時間の中では特に時間を割いていない。それは、漢字は書けなくとも、読めさえすれば辞書が引け、漢字個々の意味も、漢語の意味も調べることができるからである。学習者にとって、漢字の学習の喫緊の課題は、漢字が書けることよりも読むことができ、同訓・同音の漢字・漢語の意味の相違がわかることである。そのためには、理解できる漢字・漢語の量を増やすことが必要であり、漢字・漢語が読めれば、それらが聞いてわかることにつながる。換言すれば、少なからず漢字が用いられている日本語で書かれた情報を的確に手に入れられることであり、日本語母語話者とのオーラルコミュニケーションを通じて必要な情報を得られることである。そのためには、比較的時間を必要とする「書き」については宿題で対応せざるを得ない。もちろん、川瀬（1988）に指摘があるように、筆者担当の授業が学習者にとって有効であるためには、前提として「相当数の文字・語彙（中略）少なくとも主要な部首を含む基本的な漢字五〇〇字程度の読み書きができること」が必要であるだろう。

3.4. 展開

3.3.で示した教材を用いた授業は大きく次の3つの段階で展開され、知識の定着を図っている。

①語彙の確認（読み）
②語彙の確認（意味用法）
③語彙の確認（テキストの中での用法）

①では、語彙リストの言葉を指定範囲分、一定時間（25語を5分程度）で読んでみる。その際、わかるわからないを自己確認するため、できる限り辞書を使わずに読んでみることを勧めている。辞書を使う際も、辞書を使って読んだものには印をつけ、復習時に既知未知の区別がつくように指導している。指定範囲を設けるのは、確認した言葉を使って早めにある程度の分量の生の文を読む方が、漢字学習の達成感を得られると考えるからである。それは、また授業にメリハリを与えることにもつながる。

②では、まず順番に指定範囲の言葉を1人1語ずつ自信のあるものを選んでアトランダムに読んでもらう。それを板書しながら、上述のように、熟語がどのように構成されているかを、構成要素（各字）の意味とそれぞれの関係から説明している。特に音読みの熟語の場合は、それぞれの漢字のその熟語における意味を担う訓読みを提示するようにしている。例えば、「弛緩」の場合、「たるむ」、「ゆるむ」の読みも提示している。それに追加し「緩和」、「緩慢」のようなその漢字を使った熟語も提示し、語彙の構築に資するように考えている。また漢字の読みは音読みをカタカナで訓読みをひらがなで書き、漢語の読みのパターンを確認している。その際、漢語の読み方の基本的なルールすなわち、最初の漢字を音読みで読んだ場合、後に続く漢字も音読みで読むこと、訓読みも同様であることを強調している。それは、音読みが原語音を模した「音」の読みであり、訓読みが漢字の意味を和語に置き換えた「訓（意味）」の読みであるこ

とを理解させるためである。

筆者は、初級・中級レベルでこの点を学習者があいまいなままに過ごしていることが、上級レベルの学習者であっても、漢語の読みが確実ではないことにつながっていると推測している。よって、当該授業では、音読みで読む言葉は文明開化期の造語である「新聞」「経済」などのような例外を除き、大部分が中国で作られた言葉であり、訓読みで読む言葉は日本古来の言葉であることを理解させることが、漢字学習の基本であると考えている。このように、熟語の中には中国由来のものと、日本由来のものとがあることの整理がなされていることが語彙の構築への一助となると考える。

③は、①、②の作業を踏み台として、実際の文章における使われ方を、テキストを読み進めながら確認していく段階である。ここでは、②では強調しなかった語と語とのつながり（コロケーション）に注目しながら、語彙の構築を行っている。すなわち、ある名詞がどのような動詞と共起するのかや、その言葉を使うと文全体の意味がどうなるのかといった用法に着目するわけである。授業の中で挙げたものを例に述べると、動詞「葺く」は必ず名詞「屋根」と共起する。同じ家を構成する部分であっても「壁」や「床」とは共起し得ない。といったことである。また、「陥る」はその前に格助詞「に」をともなった名詞と共起するが、その名詞は良い意味をもつものであってはならない。すなわち、陥るは「落ち入る」であって「落ちる」ことは一般によくないことと考えられるから、陥る「場所」は自分に不利益をもたらす「場所」であり、故に文全体の意味も悪いものになるといったことである。つまり、「彼は100万円の宝くじが当たるという幸運に陥った。」は「陥る」の用法から外れるということを伝えるわけである。同様に、「育」の訓読みには格助詞「を」をともなう名詞を前に置いた場合「そだてる」と「はぐくむ」があり、基本的な意味はどちらも同様であるが、「育む」は「こどもの心を育む」とは言えても「こどもを育む」と言うことには疑問符がつくだろう。一方、「育てる」はどちらの表現にも違和感がないといったことである。口語であっても、より的確な言葉を使うためにその背景にある漢字の知識が必要であると考えている。

これらを生のテキストを読みながら学んでいく。単語として文脈から切り離すより、テキストの中での使われ方を通して理解する方が、定着しやすいと考えるからである。ヒトにとって、大きな塊で把握する方が、切り離された一つ一つを把握するより容易だからである。文を読むときでも、あらかじめ組み立てられた状態の表現の知識があれば、次の表現の予測がつけやすく、読解力の向上にもつながるはずである。

川瀬（1988）には、「意味の体系は、日本語教育にとって最も重要である。とくに漢字語彙の理解に際しては、漢字一字ずつの有する意味とともにそれの組み合わせ方、語構成の理解が必要となる。」との指摘があるが、以上の方法はこの考えを反映したものである。しかし、川瀬は書き方を軽視することへの批判として、「視覚的な漢字の識別（は）（中略）教室におけるその場限りの識別に終わりがちである。また、新出漢字を理解するための応用力にも欠けることが多い。永続的で正確な漢字の識別は書くことによって定着する。」と述べ、木偏と手偏の識別、「拾」と「捨」の旁の識別を例に挙げ書く訓練の重要性を指摘している。この点は傾聴に値するが、時間的制約を考えると、筆者担当の授業では書くことに充てる時間を理解漢字・漢語の量を増やすことに充てるべきだと考えている。それが可能なのはもちろん、受講生の漢字習得レベルが「拾う」と「捨てる」の区別ができ、「挑戦」を「桃戦」と書いたり、「推論」を「椎論」

と書かないレベルにあるからである。また、よしんばこのような間違いを犯すことがあっても、上述のように、「推」が訓読みでは「おす」と読むことを示し字義を説明すること、「推理」「推察」など「推」を用いたほかの漢語を挙げることで、「推」に対する理解は深まると考える。また、コロケーションを重視することで、漢語に対する応用力を養いうると考えている。

Ⅳ. 復習テストから

本節では、復習テストの結果を見ながら筆者担当の授業における誤答について簡単に考察する。

4.1. 読みの誤答

2009年度秋学期では、読みの問題として合計95個の漢語を出題した。その中で、受講生の50%以上で誤答が見られたものは「読み応え」であり、20%以上50%未満の誤答は「現役」、「一言一句」、「研ぎ澄ます」、「凝視」、「常軌」、「逸する」、「遵守」であった。誤答率の高いもの（20%以上の誤答率のもの　以下同様）の割合は8.4%である。

2010年度春学期では、同様に合計134個の漢語を出題した。その中で、受講生の50%以上が間違ったものはなく、20%以上50%未満の誤答が見られたのは「陥れる」、「〇〇不足」、「見逃す」、「土壇場」、「過重」、「驚異」、「この期に」であった。誤答率の高いものの割合は5.2%である。

秋学期では、比較的読みにくいと思われた「生粋」、「完遂」、「苦衷」、「狼狽」、「体よく」などは、20%未満の誤答率にとどまった。春学期では、「馴染」、「好悪」、「愛でる」、「無謬」、「風情」、「瑣末」、「破綻」、「凋落」、「侃々諤々」などが同様の結果であった。

秋学期の「体よく」を例にとれば、同じ「テイ」の読みの「体裁」を事前に提示していたことが正答率の高さ（92.3%）につながったと考えられる。反対に春学期の「陥れる」の場合（誤答率21.4%）は事前に提示した「陥る」と混同した結果と考えられる。つまり、同時期にどのような語彙を提示するかが、学習者の漢字の識別に影響を与える可能性があるということである。また、学習者の93.8%が「侃々諤々」を正確に読めたということは、特別な読みをする漢字の読みや普段あまり目にしない漢字の読みに注意しようという意識の表れであると考えられる。

4.2. 意味用法の誤答

2009年度秋学期では、意味用法の問題として合計74問出題した。その中で、受講生の50%以上で誤答が見られたものは「報じる」、「繁盛」、「代物」、「頻繁」であり、20%以上50%未満の誤答は「凛とした」、「飛躍的」、「児童」、「狼狽」、「概況」、「莫大」、「自治体」、「圏外」、「飛び交う」、「遭う」、「転嫁」、「巨万」、「衆人環視」であった。誤答率の高いものの割合は23.0%である。

2010年度春学期では、同様に合計122問出題した。その中で、受講生の50%以上で誤答が見られたものは「渉猟する」、「桁違い」、「劣化」、「滑走路」であり、20%以上50%未満の誤答は「形相」、「東風」、「育む」、「完膚なき」、「愛でる」、「若手」、「典型的」、「撤廃」、「連携」、「協定」、「停滞」、「土壇場」、「永住権」、「不法滞在」、「日系人」、「抑える」、「この期に」、「促す」、「応酬」、「挙行」、「跳ぶ」、「調達」であった。誤答率の高いものの割合は21.3%である。

誤答が多く見られたものの中に、「児童」、「滑走路」、「若手」、「永住権」、「日系人」など比較

的簡単だと考えられる言葉が含まれているが、これらは問題文が影響するものと、言葉自体の理解不足によるものとに分けられる。前者は「滑走路」や「若手」、「永住権」であり、後者は「児童」、「日系人」である。問題文の影響というのは、「若手」を例に挙げると、「彼は若手なのに、この仕事ではベテランだ。」のように、文法的な要素が文の正誤判断＝漢語の正誤判断に影響するものである。後者は「先祖が日本人で今は外国の国民は日系人と呼ばれる。」のように単純に定義を問うものである。漢語語彙の構築という授業の目標からすれば、後者の方が深刻な間違いである。しかし、同じ問題の期末試験での誤答率が25%から6.3%に減ったことから考えると、復習問題を通じて学習者自身が自分の知識を整理することによって、語彙が定着されたと考えられる。

V．授業への感想から

本節では、漢字の習得あるいは漢字語彙の構築のために、筆者が採っている方法が学習者からどのように受け止められているかを授業への感想[4)]をもとに考察する。

5.1．テキストについて

当該授業の特徴である生のテキストを読むことについては概ね好意的評価である。具体的な意見を紹介すると、「新聞の文章に出る漢字を学ぶのはこの授業の一番いい点だと思います。実際に役に立つからです。」（ポーランド女性秋）「実際に記事などに出る漢字を勉強することと読んでいた文章の内容はよかったと思います。「教科書にしか出ない漢字」より本や新聞を読むのに役に立つ漢字を学びたかった。」（ポーランド女性春）、「文章の読解は漢字を学ぶのに最善の方法だと思うので、もしもっと良い文章を読めたらいいじゃないかと思う。」（台湾女性秋）「文章を読むことを通して漢字を習うのがいいと思う。」（台湾女性春）であった。これは、秋・春両方に意見を書いた受講生の意見だが、この点を具体的に指摘した意見は、延べ28名[5)]中11名（39.3%）であった。

また、春学期のテキストについての「大阪や大阪大学に関係あるテキストを選んだので面白かった。この漢字とは普通せっしないので、あまりこの授業以外には学ぶチャンスがない。」（スイス女性春）という意見が出たのは、教師の意図（3.3.1.）が学習者に伝わった結果と考えられる。

テキストの内容については、「文学作品（偉い作家の作品、司馬遼太郎など）を読んで、その思想も知りたい。」（中国女性秋）という意見もあったが、上述のような理由（3.3.1.）で、当該授業では扱えない。もちろん、日本語日本文化教育センターで開講されている授業には、「文学」を読む授業もあるので、この点はそちらに譲りたい。しかし、こういう積極的な意見を受講生が持てるような教材の選択は当該授業において重要であることには異論はない。筆者の意図の一つには、漢字授業を通じて、受講生が「日本」への関心をもってもらうことがあるからである。

5.2．授業方法について

授業方法について具体的な意見が書かれていたものは、28名中10名（35.7%）であった。5.2.以外の意見は、宿題、復習テスト（２名）、扱う漢字の量（少ない）、授業展開についてである。宿題については、上述の通り任意ではあるが、受講生は必ず提出していることから、受講生に

とって、宿題が授業の流れの中に位置づけられているとともに、「書くこと」へのニーズも高いことがわかった。復習テストについての、「漢字の書き方をチェックする問題はテストに出ないと、どんどん書き方を忘れていく傾向があるので、簡単なものぐらいテストに出せばいいと思います。」（ポーランド女性春）という意見からもその点は裏づけられると考える。用法の問題は、正誤問題として出題しているが、単調だという意見もあることから、他の形式（語彙選択、短文作成など）も加えていくべきだろう。扱う漢字の量についての意見は、中国人学習者のものだが、非漢字圏学習者を含めたクラス構成を考えると、単純には増やせない。これはテキスト選択の問題でもあるので、両方から考えていくべきだと思う。授業展開については、「漢字を一人ずつ読む時も良かったと思います。」との意見であった。この意見を書いたのはタイの学習者で、授業では、間違うことも多かったが、人前で間違う経験が、自己のモチベーションに繋がったという理由からの意見ではないだろうか。

5.3. 受講の理由と達成度について[6)]

受講の理由は、役に立つ漢字を学びたい（6名）、多くの漢字を学びたい（5名）、漢字の読み方を学びたい（2名）、先学期の授業が楽しかった（3名）であった。

役に立つ漢字については、具体的に「日本語能力試験1級以外の漢字」（フィリピン男性）、「特に新聞の漢字」（シリア男性）という意見にあるように授業の意図をよく理解して受講したことがわかる。多くの漢字については、「自分の国であまり漢字読むきかいはないので、日本にいる間にできるだけたくさん学びたいです。」（スイス女性）、「漢字が好きだが、なかなか上手にならなかったから、もっと漢字を勉強したい。」（ベトナム女性）、「漢字が苦手だったので、面白く勉強しながらたくさん覚えたくて。」（韓国女性）という意見があった。この意見からは、漢字学習自体へのモチベーションの高さが感じられる。先学期の授業については、3名の中で実際に当該授業の受講生は1名で、後は、筆者の他の担当科目の受講生（2.2.）と、先学期の授業受講生に勧められた（オランダ男性）であった。この意見からは、筆者の授業方法が受け入れられていることが推測される。

達成度（授業の満足度）については、5点満点で平均4.25であった。その評価の理由について、具体的な意見を挙げると、「実用的な漢字の世界が広がるようになった。」（タイ男性）、「色々な分からなかった漢字を勉強するチャンスがあって、取ってよかったなと思います。」（タイ女性）、「最近、日本語での文を読んでいる時、この授業で勉強したことばがよく出るので、やはりいい授業だと思います。」（ドイツ男性）、「私にとってちょっと難しすぎた。やっぱり色々な新しい漢字を習って上手になって来たと思います。」（フランス女性）である。これらからは、シラバスに掲げた目的がある程度達成していることが推察される。

Ⅵ. 漢字教育と文化教育の関係　今後の課題

本節は、本稿のまとめとして筆者が1年間の授業を通して考えてきたことを述べる。

再三、述べているように筆者の課題は言語教育に文化教育を有効に関係づけていくことにある。本稿では、漢字を題材とした授業における筆者の試行について述べてきた。簡単に整理しておく。

①漢字の学習は「日本」（文化・社会・思想）に接近・接触する手段を得るための手段である。
②そのため、幅広い生のテキストを読みながら、漢字・漢語の用法を学ぶ。
③「書くこと」よりも「読むことと意味用法」を重視するのは、読めることが情報獲得にとっての基本だと考えるからである。
④そのために、比較的時間のかかる「書くこと」を犠牲にして、理解語彙の構築を図る。

以上が、本稿の要約、つまり当該授業の概要であるが、ここには「書くこと」の軽視が漢字力全体に及ぼす影響に対する考慮が欠けているという問題があるだろう。これについては、今後、語彙構築のサイクルの中に、いかに「書くこと」を組み込んでいくかを検討していく必要がある。その際には、時間的制限のある中で、上級学習者にとっての重要度を勘案せねばならない。筆者は、本稿で明らかなように、漢字力は漢語力と同義であると考えている。そして、漢字の授業の役割は、日本語の語彙体系の中で漢字・漢語の持つ役割の重要性を学習者に意識させることだと考えている。それ故、限られた授業時間を有効的に利用するためには、「書くこと」を自学自習に任さざるを得ないと考えている。換言すれば、授業では「書くこと」については積極的に扱わないが、その重要性を学習者が感じられるような教材の選択と提供の方法を考えていくことが重要だと考える。この間、筆者が学習者に提供してきたテキストには一定の評価がなされていると考えるが、「日本」（文化・社会・思想）に接近するためのきっかけとしてのテキストという観点から再検討を為す必要があることはいうまでもない。その際、基礎になるのは学習者の関心である。授業はあくまで、学習者の興味を広げるきっかけであるから、当該授業が「日本」に近づく契機となればいいと考えている。

注

1．本稿における漢語とは漢字を使った言葉を指す。よって、和語の対義語でも、漢字熟語を指す言葉でもない。
2．授業開始時のアンケートによる学習者自身の判断であるが、少なくとも500字程度の漢字の習得は終わっていると考えられる。
3．2010年度春学期を例にとると、当該授業と同レベルの学習者を対象にした漢字の授業は７クラス開講されている。各授業とも、内容はバラエティに富んでいて、中には日本語能力試験１級対策を目的とするものもあるので、学習者は自分のニーズで受講科目を選択しうる。
4．2009年度秋学期では、①好きな漢字と②授業の良かった点・悪かった点を、2010年度春学期では、①授業全体の評価、②授業の良かった点、③授業の改善点、④受講の動機と達成度、⑤漢字学習継続の意思、⑥好きな漢字について問うた。引用した意見は明らかな誤記を除き書かれたままの表記である。
5．注４．に回答した人数。
6．2010年度春学期のみ。

引用・参考文献

川瀬生郎（1988）「日本語教育における漢字」『漢字講座＝12　漢字教育』明治書院
山下喜代（2005）「日本語教育と漢字」『朝倉漢字講座④　漢字と社会』朝倉書店
川口義一・加納千恵子・酒井順子（1995）『日本語教師のための漢字指導アイデアブック』創拓社
鈴木修次（1990）『漢字情報力再発見　そのすぐれた表現力・伝達力・経済力』創拓社
濱川祐紀代（2010）『日本語教師のための実践・漢字指導』くろしお出版

資料１．好きな漢字（複数の漢字を鍵括弧で括ったものは同じ学習者の意見である。括弧内は理由である。）

2009年度秋学期

「風・滝」（簡単な意味）、「龍」（複雑で書きにくい）、「曦」（光と希望が満ちている感じがする）、「漁・樵」（自分の名前）、「漁樵」（意味：自然に頼り、自然に従い、ともに調和の関係で生きていくこと）、「紅」（形と意味）、「単純・簡単」（簡単じゃないが）、「愛」、「希望」、「権・価」（形）、「明」（自分の名前の意味を表す漢字）、「潤す」（発音）、「縁・宿命」（仏教における意味が好き）、「愛・光」、「海」、「永遠」

2010年度春学期

「綺麗」（文字通りにきれい）「欣」（自分の名前、喜ぶという意味なので）、「勝」（威圧感を感じられ勝利の場面を想像できる）、「臭い」（においとくさいで意味が全然違う）※、「柊・榊」（形・発音ともにきれい）、「瑄」（自分の名前）、「百合」（このジャンルのアニメと漫画が好き）、「神無月」（見た目が格好いい）、「紅・鏡・幼・笑・志」（形と連想させるものことがいい）、「酒」、「道」、「強」（意味：何をする時、必ず全力をもって、やり尽くす。問題をものともせずにがんばる）、「芯」（意味：えんぴつのように外見は地味でも中は一番大事な部分である）、「愛でる」（好きな本の名前で「あい」よりもせつない響き）、「雨」（雨が好き）、「秀」（優秀な人になりたい）、「水」、「椿」、「食べ物」（お腹が空いた）、「珈琲」（ちょっと眠い）、「誘い」（いざない　上品な感じ）、「下痢」（変な漢字の一つ）、「吐き出す」、「鬣」（たてがみ、一年生の時偶然に見つけた、難しいからこそ簡単に覚えられた）、「獨・學・佛」（古い漢字が好き）、「光・愛」（ともにやさしい気持ちを現わして、良い意味）、「欠如・寛容・競争・金融・財政・資本・経済・均衡・如実・需要・供給・国債・利子・二重構造・生産性格差」（経済の日本語に興味がある）、「霊・罰・殺」、「嬉しい（私も他人も嬉しくなってほしい）、涼しい（暑さが苦手）」、「笑」（友達はメールで気持ちがいいことを表すためにいつも使う。よく見ると絵文字に見える）

※臭いについて、良いにおいは匂いと書くことを答案返却時に指摘した。

資料２．テキスト（2010年度　大阪大学入学式学長告示（一部））

入学式告辞

平成22年度大阪大学入学式総長告辞

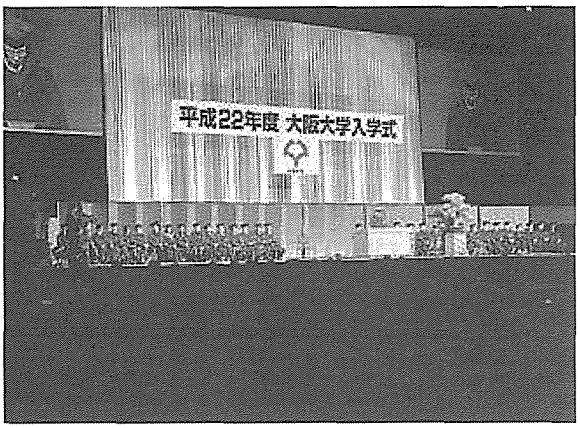
まず、本日ここに集われた3446名の学部生、3037名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。大阪を象徴する大阪城の、その満開の桜に包まれて、きょうここに入学式を挙行できることを、たいへんに嬉しく思います。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

みなさんはこれまでずっと勉学に励み、難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学ではこれをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていらっしゃることでしょう。けれども逆に、そして学部新入生の方々はとくに、大学に入るには入ったけれど、これから何をしたらいいのかよくわからないと、少々不安を抱いている方もおられることでしょう。勉強は何からとりかかったらいいのか、なれない土地でどんな生活が始まるのか、うまく友だちが見つかるだろうか、課外活動というのもいろいろありすぎて……というふうに、です。

「見る前に跳べ」ということばがありますが、わたしはみなさんに、まずは「跳ぶ」ことをお薦めしたいと思います。じっさい、「やりたい」ことは大学にいるあいだに変わってしまうかもしれません。いや、どんどん変わっていけばいいのです。何がほんとうに自分がしたいことかは、やってみなければ分からないからです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、自分の立っている場所からしか、見られないという限界がまずあります。次に、自分が習ってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、自分がなじんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を紡ぎだすためには、この小さな世界の襞をもっと大きく広げていかなくてはなりません。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるというのは、すでに知っている知識を量的に拡大するということではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。



こうした考えから、大阪大学では専門教育と並んで教養教育というものを重視しています。それも、初年次の教養教育のみならず、大学院での教養教育というものを重視しています。専門の研究をすればするほどより深い教養というものが必要になる、その理由について、まずお話ししておきたいと思います。

この科目の担当をしているコミュニケーションデザイン・センターで、以前、次のような授業がありました。BSE問題、いわゆる狂牛病問題が起こり、米国産の牛肉の輸入停止を政府が決めたあと、しばらくして米国産の牛肉の輸入再開が問題になった頃のことです。全学の研究科から、専門を超えて大学院生がこのセミナーに参加しました。まず教員が「米国産の牛肉を輸入再開するためにはどのような条件を付したらよいか」という問題提起をし、それを受けて大学院生たちの長時間の議論が始まりました。BSE問題はこれまでに知られていなかった問題ですから、それについての専門家はいませんでしたが、それに近い医学・生物学系の大学院生からBSEの原因についての病理学的な発言があり、それに対して同じ研究科の院生から異論も出ました。そういう議論の応酬にしばらく耳を傾けていた政治学・経済学系の院生はその両者に噛みつきました。米国産牛肉の輸入再開を論じるにあたっては、そんな原因論よりさらに重要なのは、日米の外交関係であり、貿易上の駆け引きである。そういう政治力学のなかでこの問題を考えないと結論は出ないと主張しました。するとこんどは歴史学や文化人類学を専攻している院生たちから、そもそもBSE問題の根底には、人間が他の動物を飼育しそこから食肉を得るという食文化のあり方、大量の食肉を得るためにこれまた大量の穀物を動物に与え、ひいては肉骨粉という人工飼料を与えて、動物自身にカニバリズムを強いる、そのような人類の牧畜文明のあり方自体を問うべきだと主張しま

資料３．語彙リスト（2010年度　大阪大学入学式学長告示に対応するもの　前半縮小）

J/MA漢字研究　　2010.5.26

1 平成
2 総長
3 告示
4 集う
5 挙行する
6 嬉しい
7 臨席
8 難関突破
9 膨らむ
10跳ぶ
11薦める
12掴む
13紡ぐ
14襞
15教養
16狂牛病
17米国産
18条件を付す
19問題提起
20異論
21応酬
22耳を傾ける
23噛む
24駆け引き
25穀物
26肉骨粉
27飼料
28牧畜
29是否　ふつうは「是非」と書く
30相次ぐ
31問題把握
32摺り合わせ
33医療
34局地
35契機
36絡まる
37介入する
38単一
39見透かす
40錯綜する
41道筋
42潜水
43専門を究める
44精緻な
45狭める
46先端
47凌駕する
48活かす
49編まれる
50全うする
51検証する
52展覧会
53調達
54専門的知見
55素人
56常日頃
57法曹界
58侃々諤々
59内輪
60符丁

資料４．復習テスト（資料２.に対応するもの　縮小）

復習テスト⑦　2010.6.30.　　名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

次の漢字の読み方を書きましょう（ひらがなのあるものはひらがなもいっしょに）。

１．応酬　２．薦める　３．掴む　４．噛む　５．襞　６．紡ぐ　７．相次ぐ
８．条件を付す　９．挙行　10．穀物　11．臨席　12．集う　13．嬉しい
14．穀物　15．膨らむ　16．牧畜

1＿＿＿＿＿＿＿＿ 2＿＿＿＿＿＿＿＿ 3＿＿＿＿＿＿＿＿ 4＿＿＿＿＿＿＿＿

5＿＿＿＿＿＿ 6＿＿＿＿＿＿＿＿ 7＿＿＿＿＿＿＿＿ 8＿＿＿＿＿＿＿＿

9＿＿＿＿＿＿＿＿ 10＿＿＿＿＿＿＿＿ 11＿＿＿＿＿＿＿＿ 12＿＿＿＿＿＿

13＿＿＿＿＿＿＿＿ 14＿＿＿＿＿＿＿＿ 15＿＿＿＿＿＿＿＿ 16＿＿＿＿＿＿

下線部のことばに注意して、次の文が正しければ○を、正しくなければ×をつけましょう。

１．アルゼンチンチームは一方的に応酬した。（　　）
２．条件を付すとは条件をつけることだ。（　　）
３．これから、授業を挙行します。（　　）
４．野菜は穀物だ。（　　）
５．学長のことばに耳を傾けた。（　　）
６．米国とはフランスのことだ。（　　）
７．平成元年（＝１年）が1989年なので、平成18年は2005年だ。（　　）
８．飛行機が高い空を跳んでいるのが見える。（　　）
９．牧畜が盛んな国には、羊（ひつじ）や牛がたくさんいる。（　　）
10．期待に胸を膨らませて、大学の門をくぐった。（　　）
11．集うとはあつまるということだ。（　　）
12．駆け引きが上手な人は交渉の際に役に立つ。（　　）
13．ガムを噛むことは脳の活性化にいいらしい。（　　）
14．飼料とは人間が食べるためのものだ。（　　）
15．是非の「是」とは英語でいうと“yes”のことだ。（　　）
16．商品開発には消費者の要望を掴むことが重要だ。（　　）

資料５．確認シート（短文を使った漢字の問題）（一部）

J/MA漢字研究2010年春学期　　2010.4.14

次の短文の読み方を書きましょう。特に下線部の漢字の言葉に注意しましょう。

１．安普請の家が震度４の地震で倒壊した。

２．長年の宿願を成就し歓喜した。

３．市井の人々の生活を活写した小説で有名だ。

４．自然を愛し育む気持ちを忘れない。

５．好悪の情を表情に表す。

（はたの　よしのり　本センター非常勤講師）